

さよならカミハマ

ryanzi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世と同じように小説を書いたり、仲間同士で遊んだり、原作とは関係なくハチャメチャ騒ぎ（人類滅亡手前）を起こしかけたり・・・そんな面白おかしい転生者たちの日常。

「字面だけならまともなあらすじだな・・・字面だけならな！」

『歴史上の人物』がいつぱい登場するので注意してください

目次

プロローグ これでもいつもよりかは平

穏な一日 ————— 1

風邪かなと思っただら早めのソーマ?

7

合コン幹事になってほしい・・・?

13

プロローグ これでもいつもよりかは平穏な一日

「成仏してくれ、オーウエル」

「突然何を言い出すんだ、私の同級生の大友和仁？」

最近、見滝原から引越してきた大友和仁？

私の本名はエリック・アーサー・ブレアだと言ってるだろ？

それに、君だって転生者だから死んだようなものじゃないか」

ある日の昼下がりの夏日書房。

二人の転生者が古書の立ち読みをしていた。

この会話からわかるように、彼らは転生者である。

一方は日本人で、一方はイギリス人だ。

だが、イギリス人の方は只者ではない。

「・・・私たちはもう死んでいる」

オーウエルは何かを思い出したようにそう言った。

「お前がそれ言うのとシヤレにならんからね??？」

「君たちはもう死んでいる」

背後から澄み切った声が聞こえてきた。

恐る恐る振り向くと、二人の背後にはモノリスが立っていた。

モノリスである。決して、テレスクリーンではなかった。

「はあ・・・心臓に悪いっての。」

というか、あまりその姿で来ないほうがいいんじゃないか？」

「安心してくれ。ここに来ようとした人たちは気絶させといた」

「それでさつきからサイレンの音が止まないってか？ははっ！この野郎・・・」

彼（？）の名はアーサー・C・クラーク。

あつ、となつた読者諸賢。その予感はずかしい。

「それで、今日は何をしに来たんだ？」

「本屋は何のためにあるのか知らないのかい？本を読むためさ」

そう言うのと、クラークは謎の光線を和仁の持つていた本に当てた。

本にとくに異常は起こらなかった。言うなれば、スキャンである。

「てめえ、それ今の時代だとデジタル万引きだからな??？」

「ははは・・・今の私は人間じゃないからセーフさ」

和仁とオーウェルは本を棚に戻すと、急いで夏目書房から足早に出て行った。

数十秒後にクラークの悲鳴が聞こえてきた。

モノリスにも痛覚があるということは前からわかってはいる。

「誰にやられたと思う？」

オーウェルがそう訊いてきた。

「かこと葉月ぐらいじゃね？」

奴が現われる前、あやめー！なんて悲鳴も聞こえたような気がするし。

多分、敵討ちにはこのはか葉月のどつちかが来たと思うぞ？

危なかったな。危うく巻き添えくらうところだった」

二人はその足で喫茶店に向かった。

「ヴェイク……」

「普通のアメリカンお願いします、雫先輩。」

ええ、当然のことながら俺たち未成年なんでジンは結構です」

この前の“War Is Gin事件”を繰り返さないためだ。

思えばあれは実に凄惨な事件だった。

もう少しで夏日書房は再び焼け落ちるところだったのだ。

雫はオーウェルの好物を提供できないことでシユンとなってしまうた。

「あと、俺にはチョコレートケーキを。」

ブレアには普通の板チョコでも与えてください」

彼女の顔に輝きが戻った。

それもブレアの好物だからだ（と彼女は思っている）。

和仁はこの哀れな先輩の肩をゆさぶってやりたかった。

こいつはとんでもない二股野郎だと。

いや、もしかすると和仁が知らないだけで三股かもしれない。

（・・・天罰当たんねえかな？）

そんなことを思っていると、喫茶店にもう一人入ってきた。

ロシア系の相貌をした美少年で、和仁たちを一瞥もせず店奥に向かった。

それもそのはずだろう。彼は反ソであるオーウエルを嫌っているのだから。

「そろそろエフレームフと和解したらどうだ？」

「向こうが断つてくるだろうね・・・」

運ばれてきた板チョコにむしゃぶりつきながらオーウエルは言った。

和仁はやれやれと思いつつコーヒーを飲む。

コーヒーはいい味がした。

それ以上に、砂糖のおかげで舌に残る絹のような・・・

「私の文章が地の文に流用された気がするんだが」

「第四の壁簡単に破らないでくれる??？」

喫茶店でのんびりした後は南風区の海浜公園に向かった。

曇り空のせいで、海は荒涼とした灰色の大地のように見えた。

「イギリスを思い出すね」

「こんななの？」

「ああ、こんな感じだ」

砂浜に足を取られながら歩いていると、一人のアメリカ人青年が倒れていた。

タコが彼の下半身に絡みついているという誰も得しない状況だった

その青年を介抱しているのは御園かりんである。

彼女がいるだけでも、その情景はマシに見えた。

「タコはやっぱり駄目だったよ・・・」

「ラヴくんはいい加減懲りたほうがいいの」

そんな二人を傍目に、和仁とオーウエルは水平線を望む。

隣にいるのは前世において最高峰のデイストピア小説を書き上げたSF作家。

その近くで倒れているのは前世において人類に宇宙的恐怖を与えたSF作家。

さきほど喫茶店で会ったのは共産主義ユートピアを礼賛したSF作家。

夏目書房にやってきたのは、なぜかモノリスの姿をしているSF作家・・・。

神戸市に引越してから、万事がこんな状態だ。

しかも、他にも転生してきたSF作家はいる。

そして誰もが今回の生を謳歌していた・・・良い意味でも悪い意味でも。

「それじゃあ私はそろそろ帰るとするよ」

「じゃあなー」

オーウエルが帰ったあと、和仁は砂浜に座り込む。

なんと騒がしい来世となったことか！

この上まだどんな期待の成就、嘲笑、苦しみを待ち受けていたのだろうか？

「それでも、残酷な奇跡の時代が過ぎ去ったわけではないという信念を俺は・・・」

「他人の書いた小説の一節を勝手に使用するんじゃない」

ポーランド人青年によって、和仁は海面まで蹴り飛ばされた。

風邪かなと思つたら早めのソーマ？

和仁は風邪をひいてしまった。

理由は言わなくてもわかるであろう。

わからないというのなら、前話を参照すればいい。

「くそ……39度かよ……あー……頭くらくらする」

体温計を放り投げて、自分の身もベッドに放り投げる。

きれいというわけではないが、散らかってるわけでもない。

そんな中途半端な状態が和仁の部屋であつた。

部屋は使っている人の心を表しているといえる。

つまりは中途半端な人間なのだ。良く言えば中庸だが。

中庸、それはこのマギレコで最も不足している要素であるのだ。

不足している、といってもそれは魔法少女の世界に限るのだが。

突然、インターフォンが鳴る。

身体をなんとか引きずって玄関を開けると、そこにはアメリカ人青年が立っていた。

彼はラテン語でこんなことを言ってきた。

「我汝ヲ解キハナタシ」

「俺、神道信じてるんで・・・」

だが、青年は構わず入ってきた。

仕方ないので、自分の部屋にも入れてやった。

「パンと葡萄ジュースを持ってきました。」

その様子だと、かなりきついでしょう?」

「・・・確かにな」

青年の名はウオルター・ミラー。

南風自由学園に通うカトリック教徒である。

敬虔でありながら、それを周りに押し付けないので友人は多い。

こういった態度もまたマギレコ世界で不足しているものだ。

彼は偉大なるものの前では常に誠実であろうとする。

白パンはやわらかく、そしておいしかった。

「あと、レムくんからのお詫びのゼリーもありますので、どうぞ。」

ぼくはいったん帰ることにしますよ。それでは養生してください」

ゼリーの入った箱には「prepreprasm」というメモが貼られていた。

そして、ミラーは帰って行った。彼は実に礼儀正しい人間だ。

いや、オーウェルも教養があつて礼儀正しい部類なのだが……。

「……このゼリー、原形質じゃないよな？」

ゼリーをいったん冷蔵庫に入れる。

やはり微妙に信用はならないのだ。

ぶどうジュースを飲み干して、ベッドにまた身を投げる。

ミラーのような人間は来てくれるだけでありがたい。

そう思っていると、携帯の着信音が鳴り響く。

それはさつき帰つていったはずのミラーからだつた。

「もしもし、どうした？」

「急いで隠れてください。彼がきます」

「彼つて……ハクスリー？」

「ええ、そうです。さつきすれ違いました」

だが、オルダス・ハクスリーは意外にも早くやつてきた。

玄関ドアを放水銃で吹き飛ばした音が家中に響き渡る。

クローゼットに隠れる暇もなく、イギリス人青年がやつてきてしまった。

「風邪をひいたつて聞いたよ」

「うん、そうだね。帰つてほしいな」

「私のソーマを飲めば、たちまち辛くなくなるよ。」

半グラムで半分分、一グラムで……」

彼は緑色の錠剤を差し出した。

「お前、それ使ったデイストピア小説書いてたはずだよね??？」

「おや、私のユートピア小説の方は読んでないんだね?」

「そうだったよちくしょう」

ハクスリーは前世で『島』というユートピア小説を書いていた。

それに描かれた社会は、ほとんど『すばらしい新世界』であった。

つまり、ハクスリーはヤク中だったのだ。

「呪うより服もう、早めの……」

「早めのバファリンじゃねえんだよこの野郎」

それから取っ組み合いのけんかが始まった。

「ほら、飲めば幸せだぞ!」

「やめろお(建前)! やめろお(本音)!」

「そうか! ソーマだけじゃ不満だって言うんだな!

ストロベリーアイスも付けてやるぞ! それで不満はないだろ!」

「そんな問題じゃねえ!!! ヤク中になってたまるか!!!」

「どうして私の善意を受け取ってくれないんだ！」

「最期までヤクやつてた奴の善意なんて受け取りたくねえよおお!!」

だが、病人が勝てるという道理はどこの世界にもない。

それは、このマギレコの世界でも同じであった。

あつという間に組み伏せられてしまう。

「ほら、楽になるぞ」

「そりやそうだけどさ!!!大麻飲んでも風邪は治らねえんだぞ!!!」

「ソーマニグラムでいやなことも幻」

「嘘だぞ、それ絶対先延ばしにしてるだけだぞ」

ソーマが口に入れられそうになった瞬間、誰かがハクスリーの肩を叩いた。

仰向けになっていた和仁はハクスリーが振り向くよりも先に誰なのかをわかっていった。

同級生の志伸あきらだ。彼女は背負い投げでハクスリーを窓から放り投げてくれた。

「大丈夫かい、和仁くん？心配になったから来てみたら・・・」

「ありがと・・・」

「うわっ、ひどい鼻声じゃないか・・・」

彼女は和仁をお姫様抱っこしながら心配した。

そして、ベッドにそのまま移すと手を額に当ててきた。

「うーん、ちよつと高熱かな? おかゆ作るから待ってて」

彼女はとたとたと台所の方に向かった。

和仁はすべてを悟った。彼女が女子にモテる理由のすべてを。

そして、和仁も今では心が女子になってしまっていた。

彼の顔はいつそう赤くなっていた。

「あいあむあぶりんせす・・・」

それが彼の最後の言葉であつた・・・。

合コン幹事になってほしい・・・？

「俺は嫌だつて言つたさ。でも、従う以外に道があつたか？」

「まあ、しようがない・・・だがな、君が結局管理に手を貸したのは変わらない」「保護せよ、しかし管理するなつて言いたいのか？ スミスさんよ？」

二人の外国人青年が中華飯店万々歳で食事をとつていた。

味は50点だが、西洋人の彼らにはその点数にとくに意味はない。

ただ、エキゾチックを体験できるだけでも満足だつたのだ。

「その名前で呼ばないでくれ。私はラインバーガーと言つてるだろ？」

「そうだつたな・・・バーガーさん。大東はすっかり軍国主義だ」

どれもこれも、ハインラインの奴が生徒会長になつたのが運の尽きだよ。

教員どもはすっかり100とルドヴィコで生徒会のいいなりだ」

「その噂は私も聞いてるよ。私の通つている学校も参考にしようとしてるらしい」

一方の英国人・・・アンソニー・バージェスはあやうくむせそうになつた。

「・・・正気か!!」

「正気も何も、彼らは結果しか見ていないんだ。」

品行方正で力強く行進する学生という結果だけをね。

101号室や君のルドヴィコ療法という過程は当然知っているはずもない」

ミスと呼ばれた本名ラインバーガーの英国人青年は落ち着き払って答えた。

「私の調べた限りでは、参京と未来アカデミーと栄を除いて、どこも見習おうと考えている」

「はっ！逆に言えば、参京や未来のインテリども、それと芸術家気取りは正気つてことか！」

「まあ、それには和仁の助言もあつたそうだがな。

彼が何と言つたかわかるか？ハイソラインはクソ野郎と言つたそうだ。

それで参京の教員たちはもう少し状況を静観することを決定した」

「あのジャップくんはだいたい信頼されてるようで！」

ミタキハラから転校してきたばっかだというのに」

「彼は実に注意深く振る舞っているからね。

今までの一般転生者と違い、良識だつてある。

少なくとも、私たちの作品を知っているくらいの教養まである」

「そりゃ教養というよりかは欠点じゃねえのか？」

「そうともいえる・・・ところで、オーウェルは？」

「あいつは思考警察とブラザー同盟を上手く両立してるよ」

「そうか・・・彼らしいな」

バージエスは金を机の上に置いて、万々歳から出て行った。

「とにかく、油断だけはすんなよ。ハインラインは手強い」

「わかってるさ。そっちも上手くやってくれよ」

同地区の同時刻、風邪が完治した和仁は水徳商店街を訪れていた。

衣美里から急にSNSで呼び出されたのだ。

どうせくだらない理由に違いないだろうとは思っていた。

嫌々ながらも、相談室に入ってしまった。

相変わらず嫌な華美さが目に痛みを走らせる。

「かつずん、いらつしやーい！」

立ち話はなんだから座ってよ！」

彼女のノリだつて、少し前は嫌だつただろう。

しかし、変人たちが友人になつたおかげで寛容になつたのだ。

というよりも、相対的に衣美里がまともに思えたのだ。

「今日はどういった用事なんだ？」

今のところ、俺には大東を除いて相談事はないんだがな」

「大東って何かあったっけ？」

「俺の友人が大東を軍国主義化しやがったんだ。」

「おかげで、どこの学校も感化されつつあるからな？」

「お前の学校にだって、影響受けた奴いるんじゃないか？」

「いるねー・・・あーし、ああいうのは窮屈そうで嫌なんだけど・・・」

「だろ？でも、ここで相談したって、あのクソ野郎はどうにもならん。」

「とりあえず、本題に入ろうか。用事を教えてくれ」

「合コンの男子側の幹事お願い」

「帰らせてもらおう」

「待つて!! 話聞いてちょうだい!!」

「やだよ! 俺絶対雑用係みたいにされるんだ!! 僕知ってるもん!!」

「抵抗虚しくも、椅子に無理矢理座らされた。」

「・・・そうだな、腰を据えて冷静に話をしよう。」

「そうだな・・・よう、これからどうする？」

「冷静になつてないよね？」

「失われた幻肢痛が帰ってこないことについてよく考えてみるんだ」

「どこの国の大使館員？」

数分もすると、ようやく冷静さを取り戻す。

「それで、どうして俺なんだ？」

「だってまともな男友達が多そうだし」

そう言われて、記憶を振り返ってみる。

まとも・・・まとも・・・まとも？

教養はあれど、奴らがまともだと？

いや、まともなものにはいるのだが。

「わかった。とりあえず、やれる範囲でやってみるよ」

バージエスは水徳商店街を訪れていた。

夏目書房に寄る前に、オリエンタルを体感したかったのだ。

『日本の商店街』というのは何度訪れても飽きない。

まるでテーマパークに来たかのような心地がする。

相談室の前を通りかかると、和仁に遭遇した。

「やあ、ジャツ・・・親愛なる兄弟よ」

「うっせえブリカス。それはそうと、合コンに興味はないか？」

「合コン? マルチツクとデボーチカが理性を取つ払つてポルするあれか?」

「ナツドサツトで会話するのやめてもらえる??」

「悪いが俺はパスだ。最近、厳しいもんでな。」

生徒会の俺が風紀を乱したら・・・わかるよな?」

「すげえわかる。101とルドヴィコのダブルは辛いよな」

「だからまあ、無理だ。他の奴に勧めたらどうだ?」

例えば、ダグラスだったらジョークは面白いしいだらろ?」

「いや、あいつは今、合コンに誘わないほうがいいと思うよ。」

仲のいい女の子と絵本作ってるし・・・」

「そうか・・・スミスはどうだ?」

「スミス・・・ああ、コードウェイナー? いいかもな」

「これで上手くいくの?」

衣美里が相談室の奥に向かって話しかける。

出てきたのは、常盤ななかであった。

「ええ、これでコードウェイナー・スミスを見つけられるかもしれません」

「コードウェイナー・スミスってそんなに見つけなくちゃいけない人なの?」

ななかはそれに答えようとしたが、すぐに口を噤んだ。

「・・・今はそれを言うことはできませんが、いつかはわかります。」

ところで、今回の合コンにはひなのさんを参加させなくていいのですか？」

「みゃーこ先輩はようやく殿方を捕まえられたからねー。」

あーしも会ってみただけど、すごく純粋な人だったよ？」